『道堅法師自歌合』本文と校異―両系統対照―

藤原静香

〈解題〉

『道堅法師自歌合』は、室町後期の歌人・岩山道堅が自詠を番えて歌合の形に仕立てた作品であり、判詞の異なる二系統の本文が伝存する。各系統の本文は、すでに『群書類従』[1]（巻二二一）・『続群書類従』[2]（巻四一九）にそれぞれ収載されているが、本作品の研究にあたっては改めて使用本文を定める必要性が認められる。諸事については、別稿[3]において検討を行った。本稿では、それらを踏まえて、両系統それぞれの底本と対校本について整理し、本文と校異を掲載する。

はじめに、『群書類従』（巻二二一）所載の系統（以下、A系統本）は、「凡河内俊恒」を名乗る判者が判詞を務め、いずれの写本も中院通勝による書写奥書を有する。京都大学中院文庫には、A系統本の中院通勝書写本が所蔵されており、現時点ではA系統本の最善本と認めてよい。この通勝書写本を直接写したと考えられる伝本に、三条西実条写・カリフォルニア大学バークレー校C.V.スター東アジア図書館（旧三井文庫）本と、細川幽斎写・公益財団法人永青文庫所蔵 熊本大学附属図書館寄託本が伝存する。さらに、宮城県図書館伊達文庫本には、通勝・幽斎の奥書に加えて、近世前期に活躍した大名・田村宗永による書写奥書が認められる。A系統本は幽斎の書写を経て、近世期に流布した歌書

として位置づけてよい。『群書類従』（巻二二一）は、中院通勝の書写奥書のみを掲出し、一見すると中院文庫本を底本として用いたように見える。しかし、奥に「右道堅法師自歌合以百花庵宗固本校合」と記されるところから、校合が行われた後の本文であることが窺えよう。中院文庫本の本文が忠実に翻刻されていない可能性が高く、改めて中院文庫本の翻刻を提示する必要性が認められる。なお、中院文庫本は虫損が多く、判読不能な箇所が散見される。虫損箇所については、バークレー本・永青文庫本によって補うことが望ましい。

つぎに、『続群書類従』（巻四一九）所載の系統（以下、B系統本）は、判者名を記さず巻末に贈答歌を有し、伝存する写本は学習院大学本・新潟大学佐野文庫本の二本のみである。佐野文庫本は、「右以飛鳥井雅枝卿自筆之本写之畢」の書写奥書を有しており、飛鳥井雅枝筆本を親本としている点が明らかである。そうした中、学習院本は前記の書写奥書を持たず、且つその筆跡は雅枝筆と言って良いところから、佐野文庫本の親本であった可能性を認めてよい。改めて『続群書類従』（巻四一九）所載の本文をみると、「右以飛鳥井雅枝卿自筆之本写之畢」の書写奥書を有しているところから、佐野文庫本またはそれ以降の写本を掲出したと考えられる。さらに、『続群書類従』（巻四一九）は両本の巻末に記される贈答歌を掲載していない。よって、B系統本は学習院本を底本として、巻末の贈答歌までを本文の検討対象に含める必要性が認められるのではないだろうか。

以上から、『道堅法師自歌合』は中院文庫本・学習院本をそれぞれ底本とすることが望ましく、かつ両系統を対照できる形に整えることにより、本作品に関する研究の発展が期待される。

そこで本稿では、A系統本の判詞については中院文庫本を底本とし、中院文庫本を直接書写したバークレー本・永青文庫本と、田村家旧蔵本であり、伊達文庫本の親本とみられる天理本について校異を示した。なお、永青文庫には、冊子本（以下、永青文庫（甲）本）と巻子本（以下、永青文庫（乙）本）の二本が所蔵されている。永青文庫（甲）本は、

本文の検討[14]から通勝書写本を直接写したものと認められるのに対して、永青文庫（乙）本は後世の写本と同じ本文を有する。さらに、筆跡についても、永青文庫（甲）本は細川幽斎筆と認められるが、永青文庫（乙）本は幽斎筆とは断じがたい。永青文庫（乙）本は後世の写しと推察されるところから、本稿では永青文庫（甲）本を以て校異をとることとする。

B系統本の判詞については、学習院本を底本として佐野文庫本の校異を示す。なお、和歌については中院文庫本を底本とし、学習院本も含めた異同を掲載する。諸本の簡略な書誌情報は左記の通りである。

［一］所蔵・コレクション名、［二］整理番号、［三］外題・内題、［四］書写者、［五］形式、［六］ID／DOIなど、［七］蔵書印（現蔵印以外を記す）、［八］その他、［九］書写奥書（同文箇所については、左記のとおりに記号で示した）

中：右一冊道堅法師自歌合也。件本親王御方申出書写畢。彼書後柏原院御勅筆也。未遂一校者也。于時永禄十二暦夏六月上八日　正五位下行左近衛権少将源通勝

幽：以右之奥書之本書写校合之。幽斎叟玄旨花押

・中院文庫本

［一］京都大学附属図書館・中院文庫［二］中院/VI/113［三］外題「歌合 道堅法師自歌 判詞逍遥院」（題簽・左肩・後）・内題「歌合　道堅法師歌也」［四］中院通勝写［五］冊子本・一面一三行・和歌一行書［六］レコードID：RB00007121（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）［八］虫損多［九］中

・バークレー本

［一］カリフォルニア大学バークレー校C.V.スター東アジア図書館（旧三井文庫）・三条西家旧蔵本［二］二三二三

［三］外題「詠草文禄至天保」（直）・内題「歌合　道堅法師歌也」［四］三条西実条［五］横本仮綴・一面二〇行・和歌二行書［六］DOI:10.20730/100121488（国文学研究資料館「国書データベース」）［八］奥に実条の花押を記す。［九］中・此一冊丹後於也足軒書写候也。于時文禄二九月廿六（花押）

・永青文庫（甲）本

［一］公益財団法人永青文庫所蔵・熊本大学附属図書館寄託［二］目録番号107.365.11［三］外題『廿五番歌合道堅自歌』・内題「歌合　道堅法師歌也」［四］細川幽斎［五］冊子本・一面一〇行・和歌二行書［六］DOI：10.20730/100097111（国文学研究資料館「国書データベース」）［八］幽斎の花押を記す。一七丁目袋綴の内側に、本文同筆「墨付拾七枚」の付箋あり。［九］中・幽

・天理本

［一］天理大学附属天理図書館［二］九一一・二九―イ二七［三］外題「五十首自歌合　道堅法師判逍遥院」（題簽・左肩）・内題「歌合　道堅法師歌也」［五］枡形本・一面八行・和歌二行書［七］「芸叢之印」「豊蔀家庫」［八］帙題簽『道堅法師自歌合　逍遥院判元禄頃写　田村家旧蔵』・『弘文荘待賈古書目』第二十六号に掲載の、一一三『道堅法師自歌合』田村家旧蔵・枡形本と書誌的特徴が合致。［九］中・幽

・学習院大学本

［一］学習院大学文学部日本語日本文学研究室［二］請求番号：一般九一一―二五九五〇〇三［三］外題ナシ・内題「歌合」［五］巻子本（元冊子本）・和歌二行書［六］DOI：10.20730/100089832［七］「月明荘」［八］箱書「岩山道堅自歌合　明応永正頃写」［八］奥に贈答歌三首。

・佐野文庫本

［一］新潟大学附属図書館・佐野文庫［二］三六―三二六［三］外題「道堅法師自歌合」（題簽・左肩）・内題「歌合」［四］冊子本・一面一五行・和歌一行書［十六］］DOI：10.20730/100207789［七］新潟大学図書館［八］奥に贈答歌三首。［九］右以飛鳥井雅枝卿自筆之本写之畢

附記

本稿は、和歌文学会第一四一回関西例会（二〇二三年四月二十二日・於京都女子大学・ハイブリッド開催）における口頭発表「『道堅法師自歌合』考―室町期自歌合の一例として―」に基づく。当日ご教示賜った先生方、ならびに貴重な原資料の閲覧・掲載をご快諾いただいた公益財団法人永青文庫（熊本大学附属図書館寄託）・天理大学附属天理図書館・学習院大学文学部日本語日本文学研究室には、厚く御礼申し上げる。

注

（1）塙保己一 編『群書類従』第十三輯和歌部・改訂三版（続群書類従完成会本、一九九三年十月）

（2）塙保己一 編・太田藤四郎 補『続群書類従』第十五輯下和歌部・改訂三版（続群書類従完成会本、一九八九年一月）

（3）拙稿「『道堅法師自歌合』諸本考」（『女子大國文』一七四号、三二～五五頁、京都女子大学国文学会、二〇二四年一月）

（4）注3参照

凡例

・濁点、句読点、並列点は私に付した。
・旧字体、異体字は通行の字体に改めた。
・和歌には私に番号を付した。
・ミセケチは網掛けで示した。
・改行箇所には「／」を挿入した。
・漢字・仮名の別、仮名遣いの別、送り仮名の有無は、異同として掲出しない。
・虫損箇所は他本によって補い、詳細を〔補注〕に示した。
・本書の題は『仙洞句題五十首』題を借用する。題について『仙洞句題五十首』と異同が認められた場合は〔補注〕に示した。
・その他、私の注記は（　）で示した。
・底本と、〔校異〕〔補注〕に示す諸本の略称は以下のとおりである。

〔和歌〕

［底本］中院文庫本
［対校本］バ（バークレー本）、永甲（永青文庫（甲）本）、天（天理本）、学（学習院本）、佐（佐野文庫本）

〔A系統 判詞〕

［底本］京都大学中院文庫本
［対校本］バ（バークレー本）、永甲（永青文庫（甲）本）、天（天理本）

〔B系統 判詞〕
［本文］学習院大学本
［対校本］佐（佐野文庫本）

〈本文と校異〉
一番
〔和歌〕
左　初春待花
1　雪の中に思ひしよりも春の色を待えてをそき山ざくらかな
右　山路尋花
2　山風の春さむげなりけふは先都の花に帰りてや見ん
〔A系統 判詞〕
左歌、旧年より花を思へる心ふかきうへに、世中のならひまた／るゝ事のわりなさは[1]、期にのぞみての心いられもさる事に／侍るを、よくいひかなへられてをかしく聞え侍り。右歌、都の／花に帰りてやみん、尤其興侍るを、第二句やあまりに／やすらかにいひくださんとて、すこし平懐のやうに／もきこえ侍らん[a]。左猶まさると定申侍[b]べし。
〔B系統 序文〕
夫自詠和歌相分左右乞求判者詞之由来、円位／上人勒三十六番於両巻長秋雄才中興龍作判之。／其縦跡綿々于今不絶者乎。爰方外公投贈此一／冊而請勝負之評論。余匪重代之家、又非当時之／器。依何事応其命哉。唯以多年芳契之好、

難拒／一日競望之情。聊志之所之愁記翰墨供一咲耳。

〔B系統 判詞〕

左、対蝋底之雪、僅雖思花信之風声、逢／春来之情、忽感木徳之陽気。意云詞云、／尽善尽美。／右、察山陰之余寒、猶帰洛陽之／好景。念慮誇不浅、風体有所思。暫雖傍右抛之、／盍虚左待之乎。

〔校異〕（1）さ―き（天）

〔補注〕底本の虫損箇所は下記により校訂した。（a）も―バ・永甲・天、（b）さると―バ・永甲・天

二番

〔和歌〕

左　山花(a)未遍

3　ふかゝらぬ(b)春に先だつ花もあれ(c)ど猶面かげは峯の白雲

右　朝見花

4　梢より色(1)づく露の袖かけて花にすゞしき庭の朝風

〔A系統 判詞〕

庭の朝風よりも峯の白雲は、面かげ遥に立まさりてや侍らん。

〔B系統 判詞〕

左歌、ふかゝらぬ春といへるこそ、ことはりにもそむかず／聞にくゝも侍らねど、春浅き春ふかきなどいへるやうには／きこえね。／右歌、上下五句ともに花といふ字の外には春の歌ともみえず。／卯月のはじめ比のわかかえでの緑

あるは、九月ばかりの初紅葉／などの景気ぞ侍る。花にすゞしきも、極暑に霜氷をいひいで／侍るも、和漢述作の一体にては侍れど、此歌にとりて風情／過たるやうにぞ侍る。左、猶おも影は峰のしら雲、なびやかに／たけもありてよろしくきこゆれば、これも左の勝にて侍なむ。

〔校異〕（1）色づく―うつろふ（学）

〔補注〕底本の虫損箇所は下記により校訂した。（a）花―バ・永甲・天、（b）ゝら―バ・永甲・天、（c）あれど猶―バ・永甲・天

三番

〔和歌〕

左　遠村花

5　いひ知ぬ片山本の家桜うへても誰か花は見つらん

右　故郷花

6　さく花のけふの主（あるじ）に身をなして思もかなし故郷の春

〔A系統 判詞〕

左、かた山本の家桜、誠に心有さまにみえ侍るを、右の歌、けふのあるじに（a）／身をなして思もかなしといへる故郷の春のあはれは、猶心もふかく／詞も艶に聞えて感涙禁じがたくこそ侍れ。

〔B系統 判詞〕

花の中には桜、々のなかには山ざくら・をそ桜・やへ／桜・かは桜などとり〴〵（1）に捨がたく侍れど、家ざくらは／い

と優にしも侍らず。右、けふのあるじに身をなして／おもふもかなしなどいへるふるさとの春の永日に、こゝ／にしもさきけむ花の契までもくちをしく、閑寂の／ながめをよくいひなされて侍れば、かた山もとの家、／花のふる里に立ならびがたくや。

〔校異〕（1）など―（ナシ：佐）

〔補注〕底本の虫損箇所は下記により校訂した（a）に―バ・永甲・天

四番

〔和歌〕

左　田家花

7　庵さす苗代垣におりそへていふかひもなき花のえだ哉[1]

右　古寺花

8　世のうさも又や逢見ん初瀬山祈りし道は花ぞふりしく

〔A系統 判詞〕

左、苗代がきの花の枝は逸興ありといへども、すこし俗に近／ていふかひなき侍らん。右の初瀬山は、心も詞もたかくして田／夫の花の陰の姿をよびがたきにや。

〔B系統 判詞〕

田家花は所しもあたら色香をと、此題にてはいかゞ思めぐらす／べからんなどおもはるゝに、なはしろがきにおりそへていふかひもなきと／いへる、ことにいふかひありて、農家の心なきなはしろ垣もかくいひたて／られぬれば、風

流にも侍かな。／古寺花は、かの二本ある杉といへる旋頭歌をとりて、又や／あひみむ初瀬山といへる、たくみに侍るうへ、世のうさも又やあひ／みむといひ、いのりし道は花ぞふりしくと侍る、さだめておもふ所／ありて沈吟も侍けむ。世俗の口すさみにてだに、かゝる述懐は／あはれなるべきに、捨身のむねよりながめ出けん花の色はあさかるべからす。初瀬／寺の恵日も此花にや春の光もくはへたまふらんとみえ侍れば、返々右の勝／とぞ申べき。

〔校異〕（1）えだ―した（天）

五番

〔和歌〕

左　花似雪

9　梢にてうつろふまではみし花の色に跡なき庭のしら雪

右　河辺花

10　暮ゆ[a]けばたゞ春風の音羽川音に聞ゝても[b]花ぞ悲しき

〔A系統 判詞〕

花の雪[c]はをのづから見馴たる跡も侍りぬ[d]べし。此春風の音こそ／まことに[e]身にしみてきこえ侍るに、末の句、水わけ山をみれば／かなし[1]もといへる古風さへかよひ来れる心ちして、かなしきの詞も此歌／などにぞ殊におかしく侍りける。

〔B系統 判詞〕

音羽河の春の夕かぜきゝすてがたくは／きこゆれど、色にあとなき庭のしら／雪はすがたもこと葉もなを立まさりて、／左の勝とぞさだめ侍る。

〔校異〕（1）も―ナシ（天）

〔補注〕底本の虫損箇所は下記により校訂した。（a）ゆけばたゝ―バ・永甲・天、（b）も―バ・永甲・天、（c）花の雪―バ・永甲・天、（d）べし―バ・永甲・天、（e）に―バ・永甲・天

六番

左　深山花

11　馴ぬれば深山の花も思ふらんあはれうき世の春やいかにと

右　暮山花

12　えもいはずさすがに花の宿なくは帰らんとせしを山の端の月

〔A系統 判詞〕

左歌、心有さまにみえ侍り。右歌、誠にえもいはずおもしろき風／情に侍るを、此初五文字こそ真実言語道断の位に言語道断／とも述出すべき所なくや侍らん。彼花にくらせる木の間より／待としもなき山の端の月も、えもいはぬ心は、此暮山の花、お／なじながめに侍るべきにや。猶此歌にとりては、えもいはぬといはずと／もにや侍らん。是らはあまりの事に侍るうへ、証議の心あさきゝ[1]／はもみえぬべく、斟酌ある申詞に侍れども、かゝる吹毛の難を申／侍らでは、何ばかりの事をかとて短慮の初一念をしるし出し侍る也。／作者さもある事と領解有べきやらん。おぼつかなくこそ侍れ。／しからば此番、なずらへて持に定め申べし。

〔B系統 判詞〕

左右の下句、あはれうき世の春やいかにといひ、／かへらんとせしを山の端の月と侍る、とりぐに／いひしりてや

さしくきこゆ。上の句も両首とも／にしゐて勝劣(2)なくや。可為持。

〔校異〕（1）あさきゝはも—あさきにも（天）、（2）劣—まけ（佐）

七番

〔和歌〕

左　古渓花

13　花ゆへや風のつらさもうき世とて又住みすてん谷の下庵

右　関路花

14　春よたゞ霞の関の朝ぼらけ花にとゞめしこゝろのみかは

〔A系統 判詞〕

左右春に(1)(a)艶に侍るとに(c)とりて、左は風のつらさも花の為なるうき世／とて(b)谷のいほりを住かへん事を思へり。右は霞の関の春のけ／色は花の色ならでも心とゞまれる由をいへり。しからば、花をおもふ／心ざしのふかさあさゝにとりて、左をまさると申べし。

〔B系統 判詞〕

左、対春風恨落英之、余去渓扉之幽居。／右、愛朝霞比艶花之、次添関路之美景。／綺語雖区分、玉唾堕同科。勝劣不分明、猶可為持乎。

〔校異〕（1）春—共（天・永甲）

〔補注〕底本の虫損箇所は下記により校訂した。（a）春—バ、（b）とて谷—バ・永甲・天、（c）色は花—バ・永甲・天

八番

〔和歌〕

左　羈中花

15　春風の朝立峯に思ひおきし(1)花の行ゑもいかゞなるらむ(2)

右　湖上花

16　朝霞さゞ波ちりて行水の海ふく風も花の香ぞする(3)

〔A系統 判詞〕

朝立峯に思ひ置けん、羈中の花の遠情あさからずは侍れ／ども、右歌朝霞さゞ浪ちりてとをけるより、海吹風も花の香／ぞするといへる終の句までとゞこほる所なくて、白玉の盤に／径寸の珠の落らんも、かばかりあざやかにいさぎよくは侍ら／じかし。是ぞ寛平以往の秀歌にもなどかたちならび侍ら／ざらんと、返々感情に堪ず侍り。

〔B系統 判詞〕

左歌、春風のあさたつ嶺に思をきしといへる上句、／たけありて心又こまやかなるに、いかゞ成けむと、第五の／句にいひはてたる、猶おもひたくや。／右歌、海ふく風も花の香ぞするといへる下の句は、／詞よくつゞきて難なくきこゆ。はじめの五もじより第四／の句まではいひつゞけたるに、毎句つゞきたる心ちもせず／きこゆるはいかゞ侍るべき。左右ともにおもふ所侍り。これも／持にて侍らむ。

〔校異〕（1）し―て（天）、（2）なるらむ―なりけむ（学）、（3）も―も（のイ）（天）

九番

〔和歌〕

左　橋下花

17　忘ずや花に露ちる夕暮も[1]もみぢの橋の秋のむら雨

右　花下送日

18　吉野より外にや出ず日数へておなじ陰なる花はみねども

〔A系統 判詞〕

左、唯有別時今不忘暮煙秋雨過楓橋とやらん侍る、／杜牧の詩の心を思へるにや。歌がらよげにみゆ侍り。右、吉野／の一境千樹の遅速に来往して、他山の春をたづぬるに／をよばざる趣[2]非無其興歟。所謂もろこしの楓橋・日の／本の吉野、いづれをゝとりいづれまさるともわきまへがたきにこそ。

〔B系統 判詞〕

此紅葉の橋、和歌にはもみぢを橋にわたせばやとよめるを／はじめにて、星夕の銀河によみならはし侍るに、これはかの楓橋と／かやをよまれ侍るにや。暮煙秋雨の感興、さだめて紅葉の／うへにてぞ侍るらん。張継が夜泊の詩も暁天霜月の比なれば、／楓葉のさたも侍らず。凡よみならはしたる此国の名所だに、よく／取いだせるはかたき事にこそ侍るに、みぬもろこしの秋の色を春の花／に染かけたるは、まことにたなばたの手も龍田姫の心もをよびがたくや。右、吉野／より外にはいでずといひ、おなじかげなる花はみねどもといへる心も浅からず。詞もいひ／しりてきこゆるにや。数反吟嘯し侍るに、とり〴〵の光輝わきがたくこそ。／から国のもみぢの橋・もろこしのよしのゝ花、とにかくにおなじ程の色香にや／侍らむ。

〔校異〕（1）も―の（もイ）（天）、（2）趣―聊（天）

十番

〔和歌〕

左　庭上落花

19　月ぞとふ庭の松風心せよ我為にこそ花もおしまね

右　暮春惜花

20　今はとてうつろふ花の木隠に有を〇だにみる〇春風ぞふく（「みるだに」に訂正か）

〔A系統 判詞〕

右、暮春の残花に対して、有をみるだに春風ぞふく、／さもうつくしげにつゞけられぬる物哉。彼秋やは人のといへる本／歌にも、いたくおとり侍らじとみ給ふるは、[2]古今集の撰者に／対して空おそろしき申詞にもや侍らん。返々心肝にぞみて覚／侍り。左歌も心[3]ふかく思入たる所、短慮の及べきにあらず／といへども、此右の歌につがへるや、不運の天賦にても侍らん。但／忠岑を合手にては負てもなどか思ひ出ならざるべき。

〔B系統 判詞〕

あるをみるだに春風ぞ吹ふく、尤よろしく／きこえ侍り。

〔校異〕（1）とふ―よぶ（天）、（2）は―かは（天）、（3）も―（ナシ：永甲・天）

十一番

〔和歌〕

左　初秋月

21　思にも限りぞ知ぬ今よりの秋に心は月の行末

右　月前草花

22　月は猶あかぬ物哉萩に露尾花に風のなびく夕ぐれ

〔A系統 判詞〕

左歌、とゞこほる所なくいひくだしてこともなく、返々こひね／がふべき様に侍り。右の草花、あまりに事好みたるさま／にて心みだれ侍り。左の方人申侍べし。

〔B系統 判詞〕

左、おもふにも限ぞしらぬといひ、秋に心は月のゆく末と侍る、／詞なだらかにすがたやさしくて、かゝる歌にはいかなる秀逸の／出あひてか勝劣をもあらそふべきと思たまふるに、月はなを／あかぬ物かなといひいでゝ、末の句をきかぬさきに、碧海青天／よな〳〵の清光もさる事よとおぼゆるに、萩の露・お花の風、／取つどへたる秋の花の容色、きくにみるおも影うかびて／よろしくも侍るかな。殊よき持にて侍べし。

十二番

〔和歌〕

左　雨後月

23　雨落し桐のひろはの露の上に心もをかずやどる月かな

右　松間月

24　伏見山松より遠の川風に浪も聞えて月ぞふけ行

〔A系統 判詞〕

桐の広はの雨の後、松のをちの波の声、月の光とりぐに／て、勝劣を定がたし。

〔B系統 判詞〕

伏見山松よりをちの河風は、月をながめくはへずとも／聞すぐしがたき風流にて侍るべきに、河瀬のひゞきに松の／なみさへかよひて、ふけたる月、尤感興ふかくぞ侍るべき。／雨後月、桐のひろ葉の露の上に心のまゝにやどりとらん影、／ことに光あるやうには侍るを、雨おちしといへる五文字、先達もよみ／たる詞ながら、しゐて好べき詞には侍らぬにや。此五文字は、[1] 桐葉の／秋の心もこもりて捨がたくは侍るに、又心をゝく心もおかずなど侍る。／ふるくはみな心をつけたるかたによめるにや。いかさま梧の葉の上よりは／松よりをちの影は、とをしろく優美にや侍らむ。

〔校異〕（1）は—には（佐）

十三番

〔和歌〕

左　山家月

25　何ごとのうきをも知ぬ(a)山にても月見る秋は心こそあれ

右　月前竹風

26　袖の露やもろくはならんくれ竹の葉分の月に秋風ぞ吹

〔A系統 判詞〕

両方心ふかきに取て、左は詞をいたはらずたちむかへる様にいひ／あらはし、右は詞やさしからん詞(くゑ艶に)云さしたる所あり。誠に上に／たゝんも下にたゝむも、かたはらの定はかたき事にこそ侍れ。

〔B系統 判詞〕

左歌、心こそあれといへる、ふとしたるやうにて、にほひなくき／こゆれど、全篇心あるさまにみゆ。／右歌、くれ竹の葉分の月に秋の風をきく時、袖の露／先もろかるべき事ことはりかなひて、かの竹風鳴葉月明前といへる古詩の心も思出られ侍れど、なに事のうきをも／いはぬ山にてもなどいへる上句、左は猶位たかくきこゆる／にや。仍以為勝。(1)

〔校異〕（1）左歌―左の歌（佐）

〔補注〕底本の虫損箇所は下記により校訂した。（a）知ぬ(いはぬ)―バ・永甲・天

十四番

〔和歌〕

左　野径月

27　里とをく野は成にけり長夜の月の行ゑを問とせしまに

右　沢辺月

28　住影（澄カ）も深江にこそよるの月み草隠れの秋のさは水

〔A系統 判詞〕

水草がくれの秋の沢水、思ひ入たる心あさからずをかしく侍るを、／遊子猶行らん遠野原（1）の秋の月、あはれ捨がたき。世に知ぬ／心地こそすれ（2）と侍る、源氏物語の歌ざまも空に通ひて此月の／行ゑ殊にやさしく見所おほくこそ侍らめ。

〔B系統 判詞〕

左、駆月下美景、要遊洛陽之外。／右、感沢畔清光、似思楚水之辺。／前後共難棄、勝負又難決者乎。

〔校異〕　遠野原の秋の月—遠野原の月（永甲）・遠野原の（天）、（2）すれ—（ナシ：天）

十五番

〔和歌〕

左　月前聞雁

29　契あれや必秋の夜をかさね月だにすめば鴈もなく也

右　海上月

30　秋深く鳴との海のはや塩に落行月のよどむ瀬もがな

〔A系統 判詞〕

左右、長高姿きよらにて、いづれとも短才[1]の商量分別／しがたく侍れども、猶左はめづらしき方やとて勝とす。

〔B系統 判詞〕

秋ふかくなるとのうみのはやしほ、まことにとゞこほりなく上下／やすらかにいひながされて、暮秋の影を月におしむかたも／やさしく侍れど、月だにすめば鴈もなくなりといへる、おぼろげの／人のよみいづまじきやうに覚侍るはいかゞ。されば、左猶めづらしき／さまに侍れば、勝と申べし。

〔校異〕（1）とも―も（天）

〔補注〕右「海上月」題は、『仙洞句題五十首』では「浦辺月」。

十六番

〔和歌〕

左　月照瀧水

31　あかなくに何をか月のくまの河清きをみがく瀧の白玉

右　杜間月

32　夕露の森のしめ縄くるしくも思木の間の月にかゝれる

〔A系統 判詞〕

左右の月、瀧の白玉は殊に金玉のひかりあざやかなるにつきて、／森のしめ縄いき（すこし）くまある心ち[1]して侍り。いかゞ。

〔B系統 判詞〕

熊野河の瀧のしら玉、きずなくきよげに侍るに、杜の／注連縄くるしくもといひ、おもふ木の間など侍る、いひ／しりて、左の瀧のしらなみも、このしめをばこえがたく／みえ侍れば、尤よき持とや申べからん。

〔校異〕（1）して―し（天）

十七番

〔和歌〕

左　月前秋風

33　雲霧も及ばぬ月のうへまではたれをいさめて秋かぜの吹

右　江上月

34　あはれ也よる鳴鶴の声一すめるふる江の水の月かげ

〔A系統 判詞〕

左は余情たぐひなく、右は有心体を存せり。たとひ楊雄／が論つくりても、此優劣にいたりては定めずや侍らん。

〔B系統 判詞〕

左歌、たれをいさめて秋風のふくといへる、ことゞ〳〵しく／きこゆるに、雲霧もをよばぬ月のうへまではとある／上句、かぎりなくたけたかくもの〳〵しく侍れば、首尾相待／の歌とぞ申べき。／右歌、よるなく鶴のこゑ、ふる江の月にすみけん秋の／夜のあはれ、たぐひなくすがたさびて、鶴の半夜をしる／心も子を思て籠中になくといへるも、よるの鶴にて／侍れば、詞の外に心あまりて、右もおとらず左もまくまじく／はべれば、これも持にて侍りなむ。

〔校異〕（1）有（道イ）―有（天）

十八番

〔和歌〕

左　月前虫

35　露の間とみるもはかなし鳴虫の命の末のよもぎふの月

右　月前聞鹿

36　月にこそ涙のこさね鳴鹿のひとりある暮は忍びても見つ

〔A系統 判詞〕

左はよのつねの事ながら、命の末の蓬生の月など例／の及べき様にも侍らぬを、右独ある暮を忍び過して月／の前にたへざらん鳴鹿の涙の程も、聞人の心の中もさ／ぞとをしはかられて、興感ふかくこそ覚侍れ。(1)

〔B系統 判詞〕

虫の命、鹿のなくね、秋を感じて月に対せむに、／いかなる涙かつれなからん、とり〴〵にあはれあさからず／侍るにとりて、よもぎふの月はえもいはず妖艶の体有て、／さしむかへる詞のほかにこもる心はなきにや。ひとり／ある暮の涙は、千万行の愁をもながくそへぬべく、余／情もふかきやうにみえ侍れば、右まさるべくや。

〔校異〕（1）こそ覚侍れ―こそ○（覚えイ）侍れ。（天）

十九番

〔和歌〕

左　旅泊月

37　浪かぜも今朝の舟出にさはらずはかゝる所の月をみましや

右　月前草露

38　消さらば花にも契れ朝顔の青葉に(1)をもき露の月かげ

〔A系統 判詞〕

左、旅泊の心めづらしくとりなされ侍る。うきも嬉敷と云心は／かゝる所の事にや。又なくあはれなる物といひけんすまのね／覚も思ひよそへられぬる詞つゞき、不可思議の秀句にこそ侍けれ。／右、消さらば花にもちぎれなどいへるわたり、心も詞も艶に侍るを、／青葉に(2)をもき露の月影ぞ、当世の歌よみの口つきにておも／白さ過て、庶幾せずも侍らん。かゝる所の月、返々とりみまほしくこ／のもしくこそ、愚意には存じ思ひ給ふれ。

〔B系統 判詞〕

槿花葉上之露、雖為眼前之体、不待日／影而凋尽之外、此風情始触耳、尤有珍気。／前一首、依逆浪疾風之障、不慮瞻秋水之／美色、自然勝境吟中有滋味、以左為勝。

〔校異〕（1）にをもき―にをもる（天）、（2）をもき―をもる（天）

二十番

〔和歌〕

左　菊籬月

39　白菊の籬の月の霜を、きていかなる色に心うつらむ[1]

右　暮秋月本無題

40　別ても又もこん世の秋の月のこるね覚ぞ猶たのまれぬ

〔A系統 判詞〕

右は、無常の観心など興ふかげに聞え侍れば、文字言／句をわづらはすに及ばずとも、末の句など己達の様に聞え／侍り。左、世のつねの歌ざまにとりてやすらかにうつくしくて、／こん世の秋の月よりも、先うつろふ心のふかきは是も無[a]／慚愧の一にこそ侍らめ。

〔B系統 判詞〕

しら菊の籬にうつろふ月の霜に、ほふをみて、こゝに／のみとゞめはてたる心の色もやさしくみえ侍るに、／わかれては又もこむ世の秋の月といへる、千々のあはれ／こもりて残るねざめの枕のうへもをしはからるゝ心ちし／侍り。左右しばらく吟じあはすれば、暮秋の暁には／猶心すむにや。

〔校異〕（1）うつらむ―うつさむ（学）

〔補注1〕右「暮秋月」題は、『仙洞句題五十首』では「暮秋暁月」。

〔補注2〕底本の虫損箇所は下記により校訂した。（a）も―バ・永甲・天

二十一番

〔和歌〕

左　寄雲恋

41　うはの空に思ひ立しは契にもあらぬ身[1]ながらまよふうき雲

右　寄風恋

42　思ひいらば便成べき山風をはげしとのみもなげきつる哉

〔A系統 判詞〕

左右の雲風、視聴の及所、さして勝負も侍らぬにや。

〔B系統 判詞〕

左歌[2]、あらぬ身ながらといへる第四の句、いひかなへてもきこえずや。／右、思いらばたよりなるべき山風をはげしとのみなげくと／いへるは、すみつかぬ山居などになれぬ山風を聞わび／たるにては[3]などかなからん、山家の心はたしかに恋の心はかすかに／侍り。俊頼朝臣の、人を初瀬の山おろしにて思ひよそふれば、／このはげしさも人のけしきのはげしきにて侍るべきにこそ。されど、／左右たがひにおもふ所あれば、おなじ程にや。

〔校異〕（1）身―身（きイ）（天）、（2）左歌―左の歌（佐）、（3）は―も（佐）

二十二番

〔和歌〕

左　寄雨恋

43　浅ましやくもる計の心をもはらはん袖のかゝるむらさめ

右　寄草恋

44　知(1)めやは思あたりの草にこそきえん露とは身を歎くとも(a)

〔A系統 判詞〕

此番、右は(b)常に見馴ぬる心詞にも侍らん。左は猶心有様にやとて／勝とす。

〔B系統 判詞〕

くもるばかりの心をもはらはむ袖は、なをざりのは山しげ山／わくべき恋路には侍らぬにや。至道無難など弁せん眼／よりぞ、まことにかくまでは思よられ侍けむ。おもふあたりの／草の露も、かのみせばや袖にと侍るおも影うかみ／ながら、下の句なを色香あるさまにきこゆるにや。されど／草葉にきえやすかるべき露よりは、袖にはらひ／がたき雨はぬれまさるべくや。

〔校異〕（1）知めやは—しられめや（学）

〔補注〕底本の虫損箇所は下記により校訂した。（a）とも—バ・永甲・天、（b）は—バ・永甲・天

二十三番

〔和歌〕

左　寄木恋

45　もらしても色なかるべきことのはや花さかぬ木の陰にくらさん

右　寄鳥恋

46　我音をも鳴ずはつゐに庭鳥のこは時しらぬ物やおもはん

〔A系統 判詞〕

右、短慮すこし思ひ分侍らぬ所あるに似たり。先左を勝／と申べし。

〔B系統 判詞〕

左は上の句、右は下の句ことによろし。／しひて、いづれをかみにたていづれを／しもにたてんとも、わきがたくこそ侍れ。

二十四番

〔和歌〕

左　寄風恋（嵐イ（1））

47　浅からず契し暮の松をだにとはずはあらしいかゞ吹らむ

右　寄船恋

48　契りこそ遠津海原行舟のほのか也しもあかぬ余残よ

〔A系統 判詞〕

左右いづれも抜群の秀逸、とり〴〵のすがた詞に侍るを、右歌／結句ぞ、此歌にとりて、今すこしよはく聞え侍れ共、事がら／ゆへ〳〵敷みえ侍り。猶持にても侍れかし。(2)

〔B系統 判詞〕

一夕対松風、恨不成之約、多年望／桑海、慕無頼之人、両首難有甚／思之体、孤舟殊具余情之徳者也。

〔校異〕（1）寄風恋（嵐イ）—寄嵐恋（永甲・天）、（2）侍れかし—侍べし（れかし）（天）

〔補注〕左「寄風恋（嵐イ）」題は、『仙洞句題五十首』では「寄嵐恋」。

二十五番

〔和歌〕

左　寄琴恋

49　思へ君なげきことはることはりもたゞわび人の宿にこそあれ（く　は）

右　寄衣恋

50　いとはるゝ身はいとひても墨染の衣の糸の乱てぞおもふ

〔A系統 判詞〕

なげきくはゝる衣（り(1)）の糸の乱れ、いづれも歌がら上科／には侍らず。よき程の持とす。

〔B系統 判詞〕

左は良峯宗貞が旧風をしたひ、／右は大弐重家が往事をまなぶに／似たり。二首の得失を論ずるに、／貧家の琴曲は

他にゆづりてみづからの／心をのぶ。禅室の衲衣は、自を専として他事をなげうつ。かの鶏足家／伝の宗風、かれこれ右を勝といふべきにや。

〔校異〕（1）くはゝゐ―くはゝる（永甲・天）

〔A系統　跋文〕

抑、此一帖は道堅禅師独吟の五十首〇左右にわかちて、拙者に／証議つかうまつるべき由命せられ侍し。おほよそ、一身の〇詠／をもちて両方の番を定しむる事は、昔も今もさだめてその／跡侍るにや。されど、打覚ゆるには御裳濯河の歌合とて五条三／品の判者たるを始として、同く宮河の波立つゞき・中河の／水茎の跡をのこせるは、世のもてあそびとなれりける。是／皆円位上人の厭苦にて誠胸中よりみがき出せる玉の光にて、／誠に無価の宝に侍べし。今、彼堅師は俗をはなるゝ事、すでに九かへり。見性を三昧として、ひとへにかた岡山の聖の跡を尋／ぬといへども、猶難波津の賢道を忘れずして、柿本山辺／の余情も樹下石上の禅定も、誠に今の世の西上人なるべし。／其詠歌にをきてまさしき判者を思に、よにかたかるべき／事にや。いはゆる累代碩学の家によぎり、当時英才の輩に求めんは、猶其かみの家を忘れず、道をもおもへるに似たるべし。／たゞ久敷をのれを知る契り計に、一はしをしるしつけんは、／何計のそしりかはとて、しゐて至愚の所にいたれるも、毘盧／の心土は凡下の一念を越ざることはりにもかなふにや侍らん。／中〳〵いなひ申さんは、身の程をはかりしり、そのうへは物のかたはし／にもたぐへるに似たり。又は、なべての歌合とて人我の執情を／あらそひ、かれ此の雌雄を論ぜばこそあらめ。忽然念起／の一句を述侍らんは、そしると〇もいかるべからず。ほむると〇も／悦べからず。只一枝微笑の縁に擬して、一筆褒貶の／詞を加るのみ也。時に明応六の年しはすのはじめの八日。これをしるす／。正六位上凡河内俊恒

〔校異〕（1）者―夫（天）、（2）の―（ナシ：永甲・天）、（3）は―そ（永甲・天）、（4）にて―にて（永甲）、（5）計―事（天）、（6）たぐへる―たぐへる（天）、（7）縁―儀（天）

〔B系統 巻末贈答歌〕

ことの葉にきゝてもふかきこゝろかな君が心や言の葉の道

返し

言の葉にことの葉そへてこゝろあるこゝろをみちのたかきにぞ見る

かぎりなくおもふなさけもあさからぬこゝろを君につくしてぞ見る

（本学大学院博士後期課程）